第35回企画展

愛荘の太鼓と世界のドラム

展示品解説書

会 期：令和３年９月４日㈯～10 月 14 日㈭
場 所：愛荘町立歴史文化博物館 企画展示室

はじめに

太鼓の歴史は古く、日本では紀元前 500 年頃まで遡るとされています。太鼓を抱えた埴輪や「古事記」の記載など、当時から我々の身近に存在した楽器といえます。太鼓が頻繁に演奏されるようになったのは戦後からで、それまでは年中行事や祭事の時など限定的な場面で使われていました。形状や用いる材料、音の出し方の違いは名称にも影響します。

愛荘町の山川原は和太鼓作りで有名な集落です。山川原の太鼓作りは、江戸時代から続く歴史ある産業です。滋賀県伝統的工芸品として指定されています。

展覧会では、様々な種類の太鼓や職人道具を展示します。また、あわせて世界の太鼓との違いについて紹介します。

●太鼓の歴史

太鼓をはじめとする打楽器の起源は古く、ヨーロッパでは 25,000 年前に打楽器の原型が存在していたことが、古代遺跡のレリーフからわかっている。日本でも群馬県佐波郡境町の天神山古墳から出土した埴輪の中に、胴長の締太鼓を腰辺りに抱えて打っているものがあり、すでに古墳時代から太鼓が使われていたことがわかる。

在来の締太鼓に加え、飛鳥時代から奈良時代にかけて、胴の中央が細くくびれた腰鼓や、皮の縁を鋲で留めた鋲留太鼓が、伎楽や散楽などとともに日本に伝来した。それらは田楽や猿楽、神楽などを経て日本の民俗芸能の楽器として広がった。その後、平安時代の雅楽の発展や室町時代の能楽の大成、江戸時代の歌舞伎、念仏踊りの流行などにより美術的工夫や構造的改良が加えられ、次第に現在のような形状の太鼓が作られるようになった。

雅楽以外には、飛鳥時代の天智天皇が作らせた『時の太鼓』や、平安末期の「前九年の役」（1051～1062）の絵巻に描かれた陣太鼓など、古くから信号具の役割を持っていたことがわかっている。

・長胴太鼓

輪切りにした原木の中をくり抜いた一木造りの太鼓。原木は欅や楠などの広葉樹を使い、皮は牝牛の皮を用いる。同じ形状の太鼓は既に宋の時代からあり、それが日本に伝わり、江戸時代に普及したといわれる。太鼓演奏の中心的楽器であるほか、相撲のふれ太鼓、歌舞伎の下座音楽、祭囃子などで多く用いられている。鼓面に巴を描くことがある。

▲長胴太鼓

・お囃子太鼓

構造的には長胴太鼓と同じだが、胴のふくらみが小さく、全体に細身の形をしている。関東一円ではお囃子太鼓1つに締太鼓2つ、鉦（かね）1つの組み合わせで打つ例が多い。その場合、太鼓は僅かに傾斜のある低い台に横にして置き、座って打つのが一般的である。

▲お囃子太鼓

・附締太鼓

能楽や長唄などに使われる締太鼓を原型とし、さらに皮を厚く、張りを強く、胴もひとまわり深くした太鼓。鉄輪に張った皮を胴の両側にあて、ロープまたはボルトによって締めつける。強く締めるほど強く甲高い音が出る。華やかな高音を発して、囃子やリズム楽器として演奏を盛り上げるためによく使われる。

▲附締太鼓

・平太鼓

素材と構造は長胴太鼓と同じだが、長胴太鼓に比べて胴の長さが短く、銅鑼（どら）のように横に広がる音を出すため、銅鑼太鼓とも呼ばれる。胴の３ヶ所に鉄環が取り付けてあり、紐や鈎で方形の木枠に吊り下げ、座って打つ。革面を上にして伏せ台に寝かせ、野球のバットのような大撥（ばち）を使って立って演奏することもある。

▲平太鼓

・締太鼓

基本構造は附締太鼓と同じである。本品は胴に桶を用いており、高さのある台を用いている。胴の桶により軽量となっており、容易に持ち運ぶことが出来る。

▲締太鼓

・雅楽太鼓

一般的に楽太鼓と呼ばれる太鼓。胴は木製で、中央が少し膨らんだ扁平な筒型の鋲留め太鼓である。輪台という台付枠に架けられ、美しい装飾が施されている。本品は鼓面に表裏それぞれ３体の獅子が描かれている。

▲雅楽太鼓

●世界のドラム

世界の太鼓は日本のものとは異なる点が多い。世界の太鼓には動物の毛が付いたままの皮を用いたものがある。使う皮も日本では牛の皮を使うのに対し、様々な動物の皮を用いている。世界では日本ほど頻繁に叩かず、冠婚葬祭や特別な儀式の際に叩く。撥（ばち）などを用いずに手で叩くものも多い。

古代西洋の打楽器は、鉦や拍子木、壺に動物の皮を張ったドラムなど単純なリズム楽器が多く、手拍子や足拍子などの人間自身のリズムを強調するために使われていた。

アジアでは、日本の太鼓に似た形状の太鼓が多く存在している。中国では、古代の大墳墓から建鼓（けんこ）や編鐘（へんしょう）などが出土しており、当時から大規模な演奏が行われていたことがわかる。

アメリカではコロンブスのアメリカ大陸発見前は、歌が音楽の中心であり、伴奏楽器に太鼓とラットルがある程度だった。大陸発見後に様々な楽器がアフリカから流入し普及した。

アフリカでは、太鼓演奏を幼い頃から訓練している。演奏は、信号のような抽象的なリズムより、口で話す言葉の音や抑揚を太鼓の打ち方で表現することが多い。

・ガ（ネパール）

チベット仏教の儀式や仮面舞踊劇に用いる。架台に吊り下げたり、把手を下にして立てた状態で、曲がったバチを右手に持って打つ。インドやネパールでも使われる。

▲ガ

・タブラ（インド）

木製の円筒形の胴を持つインドの太鼓。鼓面の縁に二重に皮が張っており、外皮と内皮はのり付けされている。皮を張る紐と胴の間に、張力を変化させて調子を整えるための木片を挟む。通常２個１組で使用し、もう１つはバーヤと呼ばれる。

▲タブラ

・グンダン（インドネシア）

インドネシアにおける太鼓の総称である。面の異なる鼓面をもつ長太鼓や、樽形で下部に数個の楔を打ち込んだもの、酒杯形に似た片面鼓などがある。マレーシア・スマトラなどは太鼓のことをブンダンと呼び、ジャワではクンダンという。

▲グンダン

・ダラブッケ（中東）

陶製、木などの杯型の胴に、にかわを用いて山羊の皮が張ってある。胴は絵画や象嵌（ぞうがん）で装飾されており、大きさは全般に小ぶりだが、呼称、形態は地方によって異なる。演奏はあぐらをかいた片方の腿の上に横置きにし、右手で鼓面の中心を強く打ち、左手で縁の近くなどを叩く。本品は、コンサート用に作られた金属製のもので、ネジで皮の張力を調整できる。また、鼓面はプラスチックフィルムを用いている。

▲ダラブッケ

・銅鼓（中国）

鼓面を上にし、底は開口している金属製の太鼓。鼓面の中心部に放射状の模様があり、周囲に同心円文が広がる。縁と胴下部には動物の装飾がついている。大きさによってはこの飾りはついていない。胴の周囲には動物、草花、舟が描かれる。胴上部の輪は吊るすために用いる。

▲銅鼓

・架鼓（中国）

日本の楽太鼓の原型にあたる太鼓。木架は全体を竜文で飾り、太鼓の前面には不死鳥が描かれる。中国北東部の遼寧省や吉林省延辺朝鮮族自治州などの朝鮮族や満族の間で用いられた。

▲架鼓

・トリンギットドラム（アメリカ）

八角形に枝を折り曲げ、片面にエルク皮を張った太鼓。太平洋岸西部に住むネイティブ・アメリカンのトリンギット族が使う。鼓面に動物や魚の絵が描かれていることが多い。本品はウサギが描かれている。

▲トリンギットドラム

・パフ（アメリカ）

パンノキやヤシの木の中をくり抜いて魚の皮を張った円筒形の足つき片面太鼓。もともとは神聖な儀式に使われていた楽器である。本品はサメの皮を使っている。

▲パフ

・フリクション・ドラム（アメリカ）

円筒形の胴の片面にのみ動物の皮を張り、皮に細い棒や紐を取り付けた太鼓。この棒や紐を指などでこすり、皮に伝わった振動によってうなるような音が発せられる。

▲フリクション・ドラム

・タムタム（アフリカ）

葬式や村への加入儀式といった重要な儀式（場面）で用いられた太鼓。セヌフォ族の神話ではカメ・カメレオン・ヘビなどの５種類の動物が最初に地球に現れたとされ、胴の部分に彫刻されている。

▲タムタム

・トーキングドラム（アフリカ）

通信用の太鼓で、高音と低音の２種類を出せる。奏者は多様なリズムの組み合わせによって言葉を使い分け、電話や電報の役割を担っていた。主に、出生・死去・結婚・祭・戦争などの伝達用楽器として作られたが、ほかにも物語を語るという使い方もしていた。

▲トーキングドラム

・ンテンガ（アフリカ）

ウガンダのブガンダ地方のガンダ族の太鼓。胴は木を植木鉢の形に削り、底を残して中をくり抜く。皮は毛が付いた状態のままで、胴を包むように捻った紐で張る。

▲ンテンガ

・ベンドレ（アフリカ）

丸い大型のヒョウタンに山羊の皮を張った太鼓。膝に挟みながら演奏する。日常の集会などに広く用いられる。

▲ベンドレ

●愛荘町の太鼓作り

山川原は昔から太鼓作りで有名な集落であった。江戸時代から続く「太鼓屋六右衛門」の屋号を有した杉本家と、戦前に太鼓作りを始めた正木家の二軒が製作していた。現在は皮の張替え修理のみを行っている。いずれも滋賀県伝統的工芸品に指定されている。

太鼓作りは牛皮を仕入れて、皮をなめすところから始まる。なめしは12月から３月にかけて行う。太鼓に使う皮のなめしは、皮の裏にある脂と毛を取り除くという工程である。皮のなめしが済むと、皮張りに移る。

皮張り作業は、太鼓の胴を土台に据え、太鼓の皮を伸ばすために小さな筒を皮のへりに差し込み、てこの原理で伸ばしていく。大型の太鼓になると職人自ら皮の上に乗り、足で踏んで皮を伸ばしていく。皮は伸ばしやすくするために水分を含んでおり、胴に沿うように乾燥させるとその形に形成されるため、2、3日天日干しする。この作業を「仮張り」という。

天日干しが終われば、皮を胴に固定する「本張り」の作業になる。乾燥で縮んだ皮を音を確認しながら再び伸ばしていく。その後、皮を固定するために鋲を打ち、余分な皮を切って完成となる。

・漉（ず）きカンナ

皮を均等な厚さにする「裏漉（す）き」作業で使用する道具。板からの刃を２～3mm出しており、ネジを外して刃の長さを調節する。ネジは板が割れるのも防ぐ。刃はコンバインの不要になった刃を使っている。作業前に必ず刃を研いでいるため、磨り減りが早い。

▲漉きカンナ

・セン

皮の裏に付いている脂肪や血、体毛をこそぎとるための道具。台に沿うように弓形になっている。

▲セン

・楔（くさび）

太鼓台と太鼓の間に押し込み、皮を伸ばす際に用いる。太鼓の大きさによって用いる楔が変わる。

▲楔

・太鼓台

太鼓の皮を張るために用いる台。丸い台に 8 本の棒を差し込んだ職人自作の台である。台の上に革を被せた胴を乗せ、棒に縄を掛けて革を張る。本品は約 30cm までの小さい太鼓に用いる。

▲太鼓台

・ジョウギ

鋲の位置を決めるために使う。横板を太鼓面に乗せ、歌口に沿わせて円を描き、皮に印を付ける。皮に当たる部分には釘が付いており、その釘が印をつけている。

▲ジョウギ

・カケヤ

太鼓台と太鼓の間にさし込んだ楔を押し込めるときに用いる槌。楔の大きさに合せてカケヤの大きさも変わる。本品は中型の楔用である。

▲カケヤ

・へり切り

鋲を打った後余分な皮を切る時に使う道具。構造と使用法はジョウギと同じだが、印を付けるのが釘か刃かという違いがある。

▲へり切り

・ビニール太鼓

胴を木ではなく、ビニールパイプにした太鼓。職人独自の発想で作られたもの。皮は鋲で留めずに差し込んだ金具に紐を架けて固定する、左右の紐を金具で繋ぐなど、締太鼓の皮の張り方を応用している。胴には植物の模様が形抜きで施されている。

▲ビニール太鼓

掲載一覧

作品名	国	所蔵
長胴太鼓	日本	当館
お囃子太鼓	日本	正木太鼓店
平太鼓	日本	正木太鼓店
附締太鼓	日本	正木太鼓店
締太鼓	日本	正木太鼓店
雅楽太鼓	日本	東円堂雅楽会
ガ	アジア（ネパール）	浅野太鼓文化研究所
タブラ	アジア（インド）	浅野太鼓文化研究所
グンダン	アジア（インドネシア）	浅野太鼓文化研究所
ダラブッケ	中東	浅野太鼓文化研究所
ダラブッケ	中東	浅野太鼓文化研究所
銅鼓	中国	浅野太鼓文化研究所
架鼓	中国	浅野太鼓文化研究所
トリンギットドラム	アメリカ	浅野太鼓文化研究所
フリクション・ドラム	アメリカ（ベネズエラ）	浅野太鼓文化研究所
パフ	アメリカ（ハワイ）	浅野太鼓文化研究所
タムタム	アフリカ（西アフリカ）	浅野太鼓文化研究所
トーキングドラム	アフリカ（ナイジェリア）	浅野太鼓文化研究所
ンテンガ	アフリカ（ウカンダ南部）	浅野太鼓文化研究所
ベンドレ	アフリカ（ブルキナファソ）	浅野太鼓文化研究所
漉きカンナ	日本	正木太鼓店
セン	日本	正木太鼓店
太鼓台	日本	正木太鼓店
カケヤ	日本	正木太鼓店
楔	日本	正木太鼓店
ジョウギ	日本	正木太鼓店
へり切り	日本	正木太鼓店
ビニール太鼓	日本	正木太鼓店

【参考文献】

横山政司 1999『はじめての太鼓』音楽之友社
財団法人浅野太鼓文化研究所 2002『和太鼓がわかる本』
小野美枝子 2005『太鼓という楽器』財団法人浅野太鼓文化研究所
愛知川町史編集委員会 2008『近江 愛知川町の歴史　第 3 巻　民俗・文献史料編』
中島順子 2008「近江文化を支える太鼓製作技術とその背景」『人間文化』23 号　滋賀県立大学人間文化学部

第 35 回企画展
日本の太鼓と
世界のドラム
展示品解説書

【編　集】山本剛史（愛荘町立歴史文化博物館）
【発　行】愛荘町立歴史文化博物館
【電　話】0749（37）4500
【発行日】令和 3 年（2021）9 月 4 日
©2021 愛荘町立歴史文化博物館